現　実　的　な　幻

——『エンネアデス』第Ⅱ巻，第5論文覚書——

多　賀　瑞　心（哲学研究室）

Zuishin TAGA

Actual Phantom

—— Notes on *Enneades* Ⅱ, 5 ——

1　プロチノス Plōtinos を読んでいくと，よく謎めいた表現に出会うことがある。『エンネアデス』(*Enneades*) 第Ⅱ巻，第5論文《可能的なものと現実的なものとについて》(*Peri tou dynamei kai energeiai*) の終り近くに出てくる次の文章もその一つである。それは「質料」のあり方を規定した箇所であるが，一読しただけでは容易に理解しがたい言葉の連続である。

「故にそれは現実的な幻である。故に現実的な虚偽である。これは真実な虚偽と同じである。これは真の非存在である」(5, 22－24)。

oukoun energeiai eidōlon· oukoun energeiai pseudos. touto de tauton tōi alēthinōs pseudos· touto de ontōs mē on.

ここでは質料についての規定が次々に四回繰返されているが，どれも同じ形式の表現で，しかも同様に矛盾した概念を結びつけたものである。(1)「現実的な幻」(energeiai eidōlon)。幻とは実際にはないものの姿があるように見えるものを言う。それには客観的な実体性がないから捉えようとしても捉えることのできぬはかなさを伴う。それに対して現実とは何よりもいま現に事実としてある状態のことである。具体的で客観的な確実性をもっている。従って幻と現実とは対立概念である。[1] 然るにプロチノスは「現実的な幻」と言う。いったいどうしてそう言えるであろうか。(2)「現実的な虚偽」(energeiai pseudos)。この場合，虚偽は幻と同じものと思ってよい。実際にはないものをあるように言うことである。すなわち，うそのことである。あるいは，そのような判断または主張に止まらず，むしろもっと存在的な事態であろう。アリストテレスは「事物としての虚偽」[2] (hōs pragma pseudos) の例として夢を挙げている。[3] このような虚偽を「現実的」という語で修飾する理由はどこにあるのか。(3)「真実な虚偽」(alēthinōs pseudos)。ここにはもっと鋭く明白な対立が見られる。虚偽が真理に矛盾するということを前提しないではいかなる論理も成り立たない。この場合の真偽も恐らく単に形式論理の上から見るべきではないだろう。やはりアリストテレスの

いわゆる「真理としての存在」(to hōs alēthes mē on)，「虚偽としての非存在」(to hōs pseudos mē on)の如く，存在に近づけて理解すべきであろう。それにしても，このような矛盾概念をあえて結合したのには深い意味があるに違いない。　(4)「真の非存在」(ontōs mē on)。ここでも「非存在」(mē on) はすぐ前の虚偽と同じものと見てよい。そうすると「真の虚偽」ということになって，上と同様の不合理が生ずる。実は「真の」と訳した語は「存在」という意味の語 on を副詞形にした ontōs という語である。周知の如くプラトンにおいても ontōs on が「真の実在」という意味に用いられていたが，その ontōs である。そこでプロチノスの上の言葉はむしろ「存在的な非存在」と直訳した方がいいかも知れない。その方が原語の意味を一そう忠実に現わしもするし，またそれが矛盾的表現であることを一そう際立てて見せるからである。

(1) わが国でも，「ゆめまぼろし」と熟し，これを「うつつ(現)」に対応させて考えている。

(2) Aristoteles : *Metaphysica* Δ 29, 1024^{b} 17−18. 日本語では「そらごと」に当るであろう。

(3) Aristoteles : ib. 23.

2　このようにして質料はまず「現実的な幻」という言葉で現わされ，さらに「現実的な虚偽」「真実な虚偽」「存在的な（真の）非存在」の如く言い換えられた。ここでしばらく修飾語を別にして考えれば，質料は「幻」であり「虚偽」であり「非存在」であることになる。だからこれら三つの概念は同じものをいろいろ異なった面から表現したものである。幻は比喩的な言い方，虚偽は論理的な面から，非存在は存在論的な面から規定したものと言える。次に，それぞれの修飾語になっている「現実的な」と「真実な」と「存在的な」との間にも同じような事情が見られる。それらも同一の性格を違った概念で示したものと考えられる。ここから次のように言ってもよいだろう。第一に，上の諸概念には幻・虚偽・非存在によって示される系列と，現実・真実・存在によって示される系列との二つが考えられる。第二に，その一系列内のどの概念が他系列内のどの概念と結びついてもかまわない。「現実的な」という語は「幻」にもつくし，「虚偽」にもつく。また「虚偽」は「現実的な」とも言われるし，「真実な」とも言われる。それならば，「現実的な非存在」と言っても，「存在的な（真の）幻」と言ってもいいはずである。なぜなら，上の四つの規定は言葉の上では違うけれども，それによって現わされる事態そのものは同一だからである。さらに第三に，上の系列に含まれる概念もそれぞれ三つずつに限られぬことも想像される。必要があればいくらでも同種の概念をもってきて説明を詳しくすることもできるであろう。

さて，最も重要なことは，これらの二系列が鋭く対立し矛盾していること，しかもそれにも拘わらず極めて緊密に結合していることである。これは常識の立場では到底考えることができない。それではこのような矛盾した表現をあえてなしたプロチノスの真意はいったいどこにあるのだろうか。いま我々に解決を迫っている問題はこれである。それを解決するために，さきほどから話題に上っている概念のうちの一つを取り上げて吟味してみたい。その一つが明らかになれば，それの属する系列の本質はもとより，それと他の系列との関連もおのずから解けてくるものと考えられる。

3　「現実的な幻」と言い，「現実的な虚偽」と言った。この「現実的」ということは何か。まずこれに注目してみよう。そのためにはまた「現実的」に対して相関的と考えられる「可能的」ということも同時に顧慮されねばならぬ。アリストテレスの哲学では，「現実的」という概念が「可

能的」という概念と対をなして，思考の根本的方式になっていた。いま我々が取扱おうとしているプロチノスの論文はこれら二つの術語の検討から始まったが，いつのまにか彼自身の思想の叙述に移っていった。その論文の目標は，ブレイエも指摘しているように[(1)]，英知的存在のあり方と質料のあり方とを明らかにすることであった。それはとりもなおさず現実的と可能的という二つの概念によって代表される二系列の世界のあり方，すなわち世界の根本的な二範疇の性格を解明しようとしたことに外ならないのである。

(1) Plotin : *Ennéades*, texte établi et traduit par É. Bréhier, Ⅱ, p.74.

4　いま問題になっている事柄に関するアリストテレスの思想は，およそ次の三点に要約できるであろう[(1)]。(1)　事物の生成または制作は現実性と可能性との関連によって考えられる。種子が成長して樹木となる場合，種子は可能態であり，成長した樹木は現実態である。建築家が家屋を建てる場合，建築家が家屋を建てることのできる能力は可能性であり，家屋を建てる働きそのものは現実性である。あるいはまた，材木や煉瓦は可能態であり，でき上った家屋は現実態である。(2) 現実性は可能性に先立つ。事物は可能性から現実性へと移るから，可能性の方が現実性よりも先きのもののように考えられやすい。しかし，現実性は，概念においても，実体においても，時間においても，可能性よりも先きである。まず，「建築する」という現実性がなければ「建築することができる」という可能性はありえないから，概念において現実性が先きである。次に，成人は現実態で，子供は可能態であるが，成人は子供に先立つから，実体においても現実性は先きである。さらに，成人がなければ子供は生れないから，現実性が時間においても先きに存在する[(2)]。(3)　現実性と可能性との関係によって実体における形相と質料との関係が説明される。例えば，現実態としての家は形相であり，可能態としての材木は質料である。このように二つの関係を同視する傾向はアリストテレスの哲学の基調をなしていた。

(1) これについては大体において Aristoteles : *Metaphysica* Θ 1−9 による。
(2) ただし，時間においては現実性が先きでない場合も考えられる（Aristoteles : *Metaphysica* Θ 8,1049b 19−23）。

5　上に整理したアリストテレスの思想はいずれもプロチノスにおいても一応認められている。まず第一に，可能的と現実的とは相関的な概念として考えられる。プロチノスも可能的ということの意味を述べるに当り，明白に「可能的ということはそれだけ独立に（haplōs）論ずべきではない」と言う（1，11）。可能的ということは当然現実的ということに対して言われる。現実的ということを予想しなければ可能的ということは成り立たない。しかし，これらの概念が完全に相関的であるとは必ずしも言えない。現実性は必ずしも可能性を予想しなくても成り立つからである。それはさきに数えた第二の思想に関連する。すなわち，現実性が可能性に先立つということはアリストテレス以来認められてきたことである。プロチノスもすぐ上に引用した言葉の理由として次のように書いている，「なぜなら，可能的に何ものでもないことはありえないからである。例えば青銅は可能的に彫像である」(ib. 11−12)。「何ものでもないこと」(to mēdenos einai) とは「無」または「非存在」のことである。現実態が無であるものの可能態は考えようがないということを述べているのである。可能的ということは青銅が彫像に対するような場合にのみ言いうるのである。青銅は

可能態であり，彫像は現実態である。この場合，青銅が可能態として成立するためには現実態としての彫像を予想しなくてはならぬ。青銅は彫像の可能態である。彫像が青銅に先立たねばならぬ。然るに，彫像はそれより後なる青銅を予想する必要はない。それ故に可能的が現実的に対する関係と現実的が可能的に対する関係とは異なる。両者は十分な意味で相関的ではないのである。次に第三の，現実性—可能性の関係を形相—質料の関係と置き換えて考えることも，少くとも無意識的な公式になっていた。それはプロチノスの次の言葉からも窺われる。「どちらかと言えば，可能的なものは現実的なものに対し，可能性は現実性に対すると言う方がよく，またもっとはっきりする。そこで，可能的なものは状態 (pathos) や形態 (morphē) や形相 (eidos) にとっての一種の基体 (hypokeimenon) の如きものである」(1, 29−30)。基体は言うまでもなく質料のことである。可能的なものが質料なら，現実的なものが形相であることは直ちに推定できる。尤もプロチノスの真意はそのように単純な形式論で律しえない複雑さをもっている所に問題があるが[(1)]，さしあたり上のような常識的な見解を念頭において出発したと言ってよいであろう。

(1) 青銅から彫像が生ずる場合を例にとれば，可能的なものは質料であるとしても，現実的なものは単なる形相ではなくして，質料と形相との「複合物」(to synamphoteron) である，すなわち「質料に含まれた形相」(to eidos to ep' autēi) である (cf. 2, 10−12)。

6　さて，プロチノスの固有の思想はどこにあるだろうか。彼は「可能的」ということの意味に二つの場合を区別しているが，この所を少しく検討していけば，おのずからその根本思想が浮び上ってくるように思う。彼は言う，「一は青銅が可能的に彫像である場合であり，他は水が可能的に雪であったり，空気が可能的に火であったりする場合である」(1, 20−21)。もともと可能性—現実性の関係はあるものが他のものへ転化するときに考えられる。そして始めにあるものが転化した後までそのまま存続する場合とそうでない場合とがある。上の文章はそのことを言ったものである。青銅は可能態における彫像であるが，現実態としての彫像が成立した後も消滅するわけではなく，やはり青銅として存続する。すなわちあくまでも青銅の彫像である。これに対して雪はもとは水であったけれども，すでに水ではない。火は空気から生じたものであるとしても，すでに空気とは言えない。水は雪の可能態であり，空気は火の可能態であるとしても，水や空気が現実態としての雪や火に存続していると言うべきではあるまい。それらは別個のものと言ってよい。かくして「可能的」にはこの二つの意味が考えられたのである。

7　この点をさらに掘りさげていくと，アリストテレスには見られなかったプロチノスの独自性が明らかになってくる。その第一は，根源的な時間性の観念とも言うべきものである。可能性が成立するとはそれと現実性との間に一定の関係が生ずることであり，しかもそれは時間の範疇においてでなければ考えられないのである。青銅が可能的に彫像であるということを説明するとき，プロチノスは次の如く書いている。——

「もしそれから何ものも生ぜず，それに対して何ものも働きかけず，またそれの過去の状態の後に将来があるのでもなく，何かになることもできない (mēd' emelle mēden esesthai mēth' d' ēn mēd' endecheto ti genesthai) とすれば，それはもとどおり青銅にすぎないであろう。それがいまある状態 (ho ēn) はすでに現在していた (ēdē parēn) のであり，しかも何ら将来

はなかった (ouk emelle) のである。だからどうしてそれが現在ある状態の後に (meta to paron auto) 他者であることが可能でありえようか」(1, 13−16)。

可能的なものはそれだけ単独ではありえない。現実的なものがまずあって，それとのある関係においてのみ存在しうる。ある関係とは時間的な関係に外ならない。上の文章はそれを言ったものである。青銅は青銅である限りにおいては可能的なものではない。現在の青銅が将来新たに存在すべき彫像の基体であると考えられるときに始めてそれは可能的なものと言えるのである。現在において彫像が成立するならば，過去の時点において青銅であったものが現在の彫像における可能的なものなのである。すなわち可能性—現実性の事態は根源的に時間を予想するのである。

可能性が時間においてしか考えられないならば，必然的に質料も時間の上の事柄である。プロチノスは，質料がいかなる意味において存在の質料 (tōn ontōn hylē) であるか，との問を提起して，次のように答えている。「それはすでに (ēdē) 可能的だからである。それは将来あろうとするもの (katho mellei) に関してすでにあるのであるが，それの存在性 (to einai autēi) は将来のものの予告 (to mellon epangellomenon) に外ならぬ。それの存在性が，将来あるであろうところのものへ進出するかのように」(5, 2−4)。すなわち，質料はその本質において時間的であり，将来への傾斜であることが述べられている。質料が将来のものの予告であるということは，それが将来のもの自体の現在からみれば過去的のものであることを意味する。ここで将来のものというのをしばらく形相と理解しておくならば，形相—質料の関係も時間の範疇においてのみ成立することが解るのである。

8　プロチノスの独自性と考えられることの第二は，可能的なものたまは質料の消極性を明らかにしたことである。それは，さきに可能的なものに二つの場合を区別した，あの事実をもう少し考察してみれば，容易に理解できる。可能的なものには，現実的なものの成立した後にも存続する場合と，その時には消滅する場合とが考えられたが，いずれの場合にも可能的なものは消極的な存在性しかもたないのである。

いったい可能的なものには本質的に二つの条件が必要である。その一つはそれが現実的なものと離れてはならないことであり，他の一つはそれが現実的なものとは別個のものでなくてはならぬことである。これら二つの条件はここでは互いに相容れない要求であるが，しかもどちらを欠いても可能的なものは成り立たない。この二つの要求がそれぞれ可能的なものの二つの場合として現われたのである。まず，始めの場合を考えてみる。例えば，青銅は新たに彫像が生じた後にも存続する。ここで積極的に存在と言いうるのは彫像であって，青銅は彫像が存在する限りにおいて考えられるにすぎない。現実的な存在は彫像である。それは現実的だからこそ存在と言えるのである。それに対して青銅はあくまでも可能的なものであるから，消極的な存在と言うべきである。むしろ存在とも言えないはずである。青銅が何らか実体として，形相として存在するならば，それはもはや現実的なものであって，可能的なものではありえない。それ故に，青銅が彫像において存続するということは全く消極的な意味において言えることである。ところで，以上の如く考えてくると，可能的なものが現実的なもののうちに存続するということはむしろ非条理のことにならないだろうか。存

続すると言えるほどの積極性があれば，それはもはや可能的なものではなくして，現実的なものではあるまいか。可能的なものが現実的なものに対して消極的 (negative) であることは，当然，前者が後者に対して否定的 (negative) であることにまで進むであろう。この要求が上記の後の場合となって現わされた。すなわち，可能的なものが現実的なもののうちに存続することなく，消滅してしまう。例えば，空気は火の可能態であるが，火において空気は消滅している。ここでは可能的なものは現実的なものと全く別個のものとなっている。空気は火に対して消極的であるどころか，さらに否定的でさえある。

かくして可能的なものの本性は消極性である。それ自身では積極的な存在性をもたず，つねに現実的なものの影に隠れている。しかも現実的なものを否定することなしには可能的であることもできない。同時に両方の条件を満たすことは不可能である。可能的なものは，これを見定めようとすれば煙のように消えてしまい，目をそらせば疑うべからざる力をもって迫ってくる。実に不気味な，そして不安定な存在と言わねばならぬ。しからば，このように矛盾した要求はいかにして解決されるだろうか。そこには前にも考えた如き根源的な時間性が働いていることを知るべきである。青銅は将来における彫像の予告であり，先取であることによって可能的である。別言すれば，彫像は過去としての青銅を自己のうちに維持保存することによって現実的である。また，空気は火から見れば過去であり，火は空気から見れば将来である。このように，可能的なものは，従ってそれと現実的なものとの関連は，そのものとしては矛盾したものでありながら，根源的な時間の秩序においてのみそれとして存在することができるのである。

なお，上に可能的なものの性格として述べたことは質料についても同様に妥当する。質料は可能的存在と言ってよいからである (cf. 4, 3—4)。しかし，質料についてはやがて後でも考えねばならぬ。

9　「可能的」ということを考察してきたのは「現実的」ということを知るためであった。然るに，可能的なものは時間性によって規定された。そこで，現実的なものは永遠性に結びついたものとして考えることはできないだろうか。時間に対立するものは永遠だからである。

プロチノスはその論文の始めの部分に次のように四つの問題を提起している。——

「可能的なものが感性界に (en tois aisthētois) あることは明らかである。しかし (1) 英知界に (en tois noētois) も存在するかどうかを検討せねばならぬ。あるいは (2) そこには現実的なものだけが存在するのか。また (3) もし可能的なものがそこに存在するとすれば，それは可能的にのみ永遠に (aei) 存在するのか。(4) もし永遠にそうなら，時間的に (chronoi) 実現されないが故に，決して現実性に達することがないのであろうか」(1, 6—16)。

これらの問題に対するプロチノスの解答を一々吟味することは差控え，さしあたりこれまで考察してきた所に関係のある点を考えてみることにする。さて，この引用文にはすでに可能的と現実的，感性界と知性界，時間と永遠，この三組の対立が始めから想定されている。これらについて，可能的と感性界と時間とを一方に，そして現実的と英知界と永遠とを他方に，それぞれまとめて対置することができる。このように二つの範疇を仮定してみると，事態はよほど理解しやすくなる。だが，

そのような形式的な解釈が十分でないことは言うまでもない。

上の問題の (2) は「英知界には現実的なものだけが存在するのか」というのであった。この問に対しては一応肯定的に答えることができる。なぜなら，可能的は現実的に対し，また感性界は英知界に対して，矛盾的に対立するのに，可能的なものは感性界に属するからである。しかしこのように答える前に，この問そのものに対して反問してみる必要はないか。すなわち「そもそも英知界に現実的なものが存在するか」と問うべきではあるまいか。さきに可能性と現実性との関係を問題にしたとき，その関係が成立するのは時間においてであることを見た。可能的なものは現実的なものなしにはありえないから，両者は相対的である。共に時間における存在である。感性界の事柄である。従って，現実的なものが永遠の英知界にあると言うのは不合理ではないか。ところがこの反論もまた一面的たるを免れないのである。現実的ということには二重性がある。それは形式においては可能的ということと同列にあって対立するが，価値的秩序においては上下の差がある。前に明らかにしたように，可能的なものは消極的な存在性しかもたず，積極的な存在性は現実的なものの側にある。現実的なものは次元において可能的なものを越えている。すなわち，現実的なものには，可能的なものに対して相対的なものと，可能的なものを越えた絶対的なものとが考えられる。そして前者は時間性に規定される現実的なものであり，後者は永遠性の世界に属する現実的なものである。そこからして，英知界には現実的なものしか存在しないことは，論ずるまでもないことだったのである。(1)

以上の如くであるならば，英知界における可能的なものや質料がなぜ問題にされなくてはならぬのか。さきの問題の (1)，(3)，(4) にもそのことが取り上げられている。その理由は次の如くであろう。感性界において現実的なものは形相と質料との複合物 (to synamphoteron) であった (2,10−12；3,23−24)。例えば青銅の彫像がそうである。英知界における現実的なものは形相であるが，ここにも感性界と同様に形相と質料との関連が考えられてもよさそうだからである。例えば，英知界には魂 (psychē) という形相があるが，形相である魂も他のより高次のものに対しては質料であろう (3, 14−15)。それでは，いったい英知界にも質料が，従って可能的なものが存在すると言ってよいだろうか。厳密に言えば，それは存在しない。上来論じてきたように，感性界と知性界とは根本的に次元が違う。時間と永遠との違いがある。現実的なものと可能的なものとの関連，形相と質料との関連は，あくまで時間の次元においてのみ考えられる。知性界は明らかに現実的なものだけの世界，形相だけの世界である。プロチノスの真意はそうであった。尤も，彼は英知界に「質料の如きもの」(to hōs hylē)，すなわち「質料に相当するもの」の存在することを必ずしも否定しなかった。しかし，それは感性界のものとは本質的に異なったものであることを忘れてはならない。

(1) このことをプロチノスは次のように述べている。——

「もしかしこには可能的なものを含む質料もなく，またそこにすでに存在してはいないところの何ものも将来あることなく，さらに……他者へ転化する何ものもないとすれば，かしこには可能的なものは存在しえないであろう。かしこの存在は永遠的のもの (aiōna) であって，時間的のもの (chronon echonta) ではないからである」(3, 4−8)。「可能的なものは他のものの参加によって現実性へ導かれることを欲し，その結果現実的なものが生ずるが，自己が自己自身においてあり，永遠にそのあり方を保つものは現実的な存在で

ある。だから一切の根源的なものは現実的である。なぜなら，それはもつべきものをばそれ自身で永遠にもつからである」(3, 28−32)。

10　「もしその本性は不眠であり，生命（zōē）であり，しかも最善の生命であると言うことが正しいなら，かしこには最も美しい現実性があるに違いない。かくして一切は現実的であり，現実性である。一切が生命である。かしこの場所は生命の場所であり，真の意味において魂と英知との原理であり，源泉である」(3, 36−40)。

プロチノスは現実的なものの本性を生命に帰して，このように書いた。彼によれば，実在は現実的であり，そして生命に外ならない。ところで，この小論において数多くの対立が考えられた。すなわち，現実対幻，現実対虚偽，真実対虚偽，存在対非存在，現実的対可能的，形相対質料，永遠対時間，英知界対感性界，等々。これらは，始めに予想した如く，すべて二系列の世界範疇に配置することができる。それらは，永遠性と時間性との対立に明らかに見られるように，次元において根本的に相違する。永遠性の世界は積極的な実在の世界で，時間の世界は単なる消極的な非存在の世界である。しかし時間の世界は，「永遠の動ける影像」(eikōn kinētos aiōnos) とプラトンも言う如く，[1] やはり永遠の姿を宿している。感性界は英知界の反映であり，鏡である。

そこで次のように言うことも許されよう。我々の住む世界は，常識で考えている如く現実の世界ではなく，却って幻であり，虚偽であり，非存在である。[2] 幻は真の実在と対立し矛盾しつつも，なお実在から生命の光を受けているのである。プロチノスが英知界の質料を規定するのに用いた「現実的な幻」等の不思議な言葉は，実は感性界における我々の存在のあり方を現わしたものと解しても差支えないであろう。それにしても，時間は時間によって超越することができない。時間が時間であることを知るとき，時間は超越されている。この世が幻であることを感得することの外に我々において真の現実は存在しないのである。

(1)　Platon : *Timaeus* 37 D 5.

(2)　このことは親鸞の次の言葉を連想させる。——

「煩悩具足の凡夫，火宅無常の世界は，よろずのこと，みなもて，そらごと，たわごと，まことあることなきに，念仏のみぞまことにておわします」（歎異抄，後序）。

なお，「存在的な非存在」の如き言葉を理解するのに，禅僧薬山（751−834）の問答はいい参考になるであろう。——

「師坐次に，僧あり問う，<兀兀地としてなにをか思量する。>師曰く，<箇の不思量底を思量す。> 曰く，<不思量底いかんが思量せん。> 師曰く，<非思量>」（景徳伝統録，巻14，薬山伝）。